

体育センターの退職を迎えて

小俣幸嗣¹⁾

はじめに

2017年3月をもって筑波大学を定年退職します。準研究員（文部技官）の2年間と教員としての32年間にわたり体育センターにお世話になりました。

振り返ってみますと、東京教育大学大学院を終える頃、東京・幡ヶ谷の校舎で初代センター長となる大石三四郎先生の面接を受けて、開学間もない筑波の地に赴任しました。技官時代は人手が不足していたのか、大石先生名で開講された柔道を担当し、集中授業もほぼ全てに顔を出すなど忙しく動いていました。しかし、大学体育の何たるかに考えも及ばないまま過ごした2年間でした。

その後、順天堂大学体育学部に7年間勤め、柔道担当の山川岩之助先生が体育センターから学群の体育経営専攻に異動するのを機に着任しました。幸せなことにそれから現在までは、柔道だけにどっぷり浸かりながら教員生活を送ることができました。

せっかくの機会をいただきましたので、大学人、柔道人としての折々の思いをご披露させていただきます。

1 大学体育

1) 柔道

・内容

大学の授業で何をやるのか、という問いは教

養体育に関わる教員に共通の古くて新しい問題であろう。柔道においては中学高校生を対象に指導要領が定められているが、それと同じであっては、大学体育の意味が問われることになる。さらに教養教育の存在理由が強調されたのは、教養組織の解体が進む中、教養体育廃止論が出てきてからのことのように思われる。

最初に赴任したのが体育系大学であり、教員になることを前提とした指導法中心の授業であったので、センターの授業では学生はゆったり乱取を楽しめるようにしたいと考えた。3学期制の時代は時間が潤沢で、2学期を終える頃は技術的にも格好になり乱取にも余裕が出てくるので、審判も含めて試合まで行うことができた。

特に絞技や関節技は、初心者には危険が伴うとみられ敬遠されがちであるが、知識、理解のためにと積極的に紹介した。テレビなどの映像を見て共感が得られることを期待してのことである。投技も実技助手がいない時代にも、原理や構造を示すため学生相手にできるだけ実演した。捨身技なども専門家がうまく教えられなくてどうするとばかり、巴投も扱った。

外国人の柔道ではよく見られる返し技が国内では少ないことをヒントに、攻撃のすぐ後には、相手が返し技をかけるよう組み合わせて指導してみた。出足払とその返し技の燕返、大外刈と大外返、膝車と返し技の膝車など、初歩の的な技の単純な組み合わせである。すると、瞬

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

時の返し技の理解とともに攻防の緊張感も出てきて、自由練習としての乱取が活発になることに気づいた。

技の解説は細部に及ぶ丁寧な指導ではなかったと自覚している。新しい動きは慣れる時間も必要であるし、情報をたくさん与えずぎて、混乱する例をよく見たからである。柔道のような直接格技では自分の動きを作る他に、相手という変数への対応が同時に必要となるからである。寝技で「こんな感じだ、まあ、少し動いてみよう」とやったら、ぞんざいに映ったらしく、TAに疑問を投げかけられたこともある。小さなことでも学生が「なるほど」「わかった」と肯首し、自分で「できた」という達成感を指導者が逆に奪っていないか、年齢を増すようになって感じている。

・女子の受講者

私の学生時代、男のスポーツの代名詞であった柔道、サッカー、野球、ラグビーなども男女の垣根が取り払われて久しい。赴任した当時は女子柔道が国内で競技化したばかりで、「女子も受け入れている」と備考に示すような状態であった。高校の柔道部でも女子はほとんどいなかったし、授業でやっていたところは珍しかった。手元の教官手帳を調べると、着任後1985年から1987年までの3年間、女子の年間受講者数はそれぞれ34%、25%、29%であった。まだ新しいスポーツとみられていたのだろうか。ちなみに3学期制が終了する最後の3年間2009年から2011年をみると、44.7%、44.5%、56.6%であった。男女比で男子を上回るクラスも珍しくなくなり、そのせいか、熱心な女子が多くなったように感じる。

・寒稽古

12月から始まる3学期には、暖房のない更衣室で着替えて道場に出るまで、学生たちには厳しい環境だったと思う。授業記録を見ると1月2月は乱取中心で試合などもやらせていたよ

うだが、相当な忍耐を強いられたことだろう。

寒稽古は柔道部の行事だったが、欠席が多い学生に対するサービスとして補講の機会にしていた。そのうち、比較文化や日本語日本文学類の存在に気づき、これらの学生を中心に自主的な参加を案内してみたところ、平成2年からは少数ながら参加者の記録が見られた。それからは電車通学も少なく宿舎も大学に近いという学生の居住環境を最大限利用し、修行的な意味や日本の伝統行事に参加する意義も積極的に紹介するようになってみた。その結果、10年後の平成12年には数日間参加するリピーターは珍しくもなく、全7日間の皆勤者が3名出るなど期待以上の結果を得ることができた。私のほか武道論の藤堂良明先生の授業の学生も参加してくれ、40人以上集まる日もあり柔道部を脅かしそうだった。しかし、この光景も3学期制の終了とともに消滅した。

・科目選択

数年前まで学生会館に集まって科目選択をしたオリエンテーションでは、第1希望で来る学生が少なく、何とか時間内には定員が満たされるものの、その間寂しい思いで第2希望者を待つ状態が続いた。

授業終了時の感想文によれば、実は柔道そのものに魅力がないのではなく、一応他の希望科目にあたってみた、というのが実情だった。そのうえ、やってみたら意外と面白く精神的にも得るものがあった、などと担当教員として涙無くしては読めないようなことまで書いてくれる学生が少なくなかった。私自身は満足気味だったが、さらに柔道の名譽のためにと一念発起し、世間の先入観やイメージを払拭しようと学術論文にして大学体育研究に発表した。

現在は、個人の選択希望をコンピュータが調整する履修登録方式になったので、希望科目が取れないという不満も解消されたく丸満である。実はこれは本学工学系の学生が希望科目を取れなかったという動機が発端だと聞いた。

そこで卒論でシステムの研究をし、希望順位を入れることによりほぼ満足出来るという結論に至ったのだという。

このような教員側と学生側の問題がうまく噛み合って、採用された方式であるが、今は半期完結型で授業数が減っているため、実技時間を減らさないためにも有効に働いている。こういう先駆的試みが本学で稼働したことは嬉しいことである。

・初学者

「大学に来てまで柔道をやるとは思わなかった」。何度耳にした言葉だろう。それだけ柔道は、大人が嗜むというイメージではないのだろう。武道必修化で中学、高校で少しは経験しているはずだとはいえ、まだまだ未経験で参加する学生の方が多い。従って、「できないことを指摘しない」「試行している時は見守る」「できたら褒める」を心がけた。夕方から相手にする柔道部の専門家集団とは全くの逆の対応をするのである。

大木昭一郎元体育センター長が学生に対しては「教えさせていただく」のだと語ったという。敬愛する西藤宏司先生も「最初は誰でも素人」という名句を書きしておられた。

自分でも本当に得心したのは40歳過ぎてスノーボードを始めた頃である。「スキーならこんなことには・・・」と何度も情けない思いで練習したが、学生に対する自らの指導を省みる良い機会になった。思い出して体育センター元教授寄金義紀先生が「初心者」と「上手・下手」の区別をつけることについて書かれた「体育指導の中の間人尺度—指導者が心すべきこと—」(保健の科学, 31-3, 1989)を読み直してみた。指導者の姿勢に関する先輩達の至言を吟味すべきだったと反省した一方、これは専門家相手の指導でも変わらないということに気づいた。

2) スキー

スキーの集中授業は、120人定員でキャンセ

ル待ちもいたくらの人気種目で、長い間センター教員が総出で担当した感がある。北国出身で幼少から親しんでいたもので、雪なし県の出身者で“苦労”して習った人たちとは、スキー感が違っていたようだ。

アメリカ、欧州からの帰国学生からスキー経験を聞いていたら、そのスケールの違う体験に触発された。自分の原体験が近くの何でもない山を登っては、まっすぐ滑り降りるだけというものだったこともあり、ゲレンデを鏡のように整備したスキー場には違和感も感じていた。そして自分も行ったことはないが憧れであるカナダのヘリコプタースキーを、究極のスキーとして講義で紹介した。現在、バックカントリースキーが人気の一方で既存のゲレンデが苦労している状況を見ると、スキーヤーのニーズが変わってきていることを考えさせられる。最近ようやく大学体育連合でもバックカントリーの研修会が開催されるようになったが、時代の要請だろうか。

3) スノーボード

40歳を過ぎた頃、スノーボードが若者を中心に大流行し、スキー場を一変させ、時にはスキーヤーとの軋轢も見られるまでになった。面白そうなので自分も経験したくなり、非常勤講師の道具一式を借りて試し、講習会にもでかけ、スノーボード班の開設を提案した。大学の実習ではまだ珍しい頃だったと思う。

スキーをやめてボードに変えるわけではないし、若者に爆発的な人気の新しい種目を誰が指導するのかという単純な問いからだ。それでも「スキー実習」を「スノースポーツ」とすると名称の変更には抵抗があった。ちょうどスキー参加者が激減しつつあった状況にも助けられ併設が可能になった。

現在は、スノーボードを希望する学生数がスキー班をうわまわっており、それにつれて学外に依頼している指導者もスキーからスノーボードに変わった。スキー、スノーボードは共通性

があるのだから、まずは雪の上に学生を呼ぶというのが私の狙いであり、“専門”でなかったのを幸いに、勝手なことができたのかもしれない。

私は毎回初心者を担当しているが、最初に倒れ方を扱うため、受け身を前方向、後ろ方向とやって、倒れることに慣れることから始めている。倒れないようにするという、一般社会における反射的な動きとは逆で、諦めて安全に倒れるよう対処する、という柔道の考えが前提である。

スノーボードは始めてから立つまでに時間がかかり、難しく見えるが立ってしまえば、一枚板なので自分でなんとかなるようだ。どうしたら良いのか、と不安げにこちらを気にする学生にも、「人の真似をしてみたら」「自分であれこれやってみよう」とアドバイスするだけで、あとは放任している。そのせいか、最終日、頂上からの滑走をこなしてきて、「先生のおかげです」という学生には会っていない。

2 著作

研究の成果を世に問う著述は大学人として必須の活動であるが、芳しかったとは言えない。もともと、机に向かったの作業より、立ち動いているのが好きだったこともある。順大に着任したてのころ、県立の校長を退職した藤森寿男先生（高師卒）のお宅に呼ばれ、『千葉県体育・スポーツ黎明記』なる自費出版の本を恵贈された。柔道の後輩というだけで面識もなかった方であるが、試合結果を記録しておくことの重要性を心に刻むことができた。

40歳を過ぎたころ、恩師竹内善徳先生が研究費でパソコンを買ってくれたのを機に、ワープロで作業していた私の環境は大きく変わった。競技の資料を整理していたとき、選手時代を過ごした時期と柔道の国際化とが重なったのに興味が湧き、『競技柔道の国際化』を作った。素人ゆえ躓きの連続だったが、我々のコーチングを単なる汗かき仕事に終わらせてはいけない

という使命にも似た衝動に突き動かされていたように思う。

次の契機は、茨城県の中学校教員を対象とした柔道実技の講習会である。ある時、「よく出る質問なんですよ」と得意気に定番の課題を始めた時、「そういう課題を本にして世に出すのが、大学の先生の仕事でしょう」と一括され、言葉が出なかった。10年間の事業を経て質問を整理し、一緒に活動した茨城大学の尾形敬史先生と『柔道指導のQ&A』にまとめ宿題を片付けた。柔道着一着の道場暮らしでも、文字にして伝えるべき仕事があることを教えられた。

3 国際活動

1) 普及

26歳の時、ただ若くて体が動くというだけで、4週間オーストラリアへ講道館から派遣されたのが最初の海外指導である。大きな国なので4都市を1週間ずつ2人でまわった。翌年からは、講道館の先生らとインドネシア、タイ、シンガポール、香港など東南アジアの4か国を4週間かけてまわった。暑さと湿気の気候のなか量や柔道着なども十分ではなく、本くらいしか情報もない時代に、現地の人の柔道に取り組む熱意に敬服したものである。

2) 強化

筑波に赴任後は、分野がガラリと変わり強化委員会の仕事（科学研究部）で欧州遠征が主となった。現在のようにカメラを手にということではなく、コーチ補佐みたいなものだった。飛行機はアラスカのアンカレッジ経由で欧州に入った時代である。当時の上村春樹ヘッドコーチ（現講道館長）らについて約10年活動をした。メディアに出ない内外のトップレベルの選手たちの厳しさもたくさん見たし、国によって違う欧州の柔道事情や人脈を肌で知ることができた。この頃見聞した欧州人の行動様式などの経験が、現在の外国人との付き合い方に影響しているような気がする。

3) 指導者指導

大学の監督を終え時間が自由になってからは、コーチングセミナーの仕事が始まった。オリンピック・ソリダリティの活動では、ナイジェリア、バングラデッシュ、インドネシア、中国、シンガポール、マレーシアなど一人で赴いた。他にもロシアは10日間、インドで3週間など、高レベルの受講者を相手にした。口先では上手く伝わらず、技は全てやって見せなければ納得しないので、体力的には厳しかった。一人で相手しているため怪我や体調の不良は許されず、一部始終何台ものビデオで撮影されていることも多く、緊張が続いた。

指導では一つの技の精度を高めることを求める日本人に対し、一つの技でも豊富なバリエーションを知りたがる外国人コーチの要求が理解できるようになった。その結果、相手の要求に合わせて技の体系化も提供できるようになった。さらに、外国人は質問も活発で、「なぜ」を納得するまで繰り返すので、答えに窮することも多かったが、逆に漠然とした認識を自ら明確にすることにもなり成長できた。

4) 形

国際柔道連盟(IJF)で「形」の世界大会が始まるというので発足した全柔連形特別委員会に、58歳のとき加わった。同時にアジア連盟の形委員長にも就任して審査員試験、アジア選手権大会の運営など土台作りに着手した。IJFの形委員としてもルールの整備、世界選手権大会の運営などに関わった。競技化によって、私自身も欧州で形の実技指導をする機会が増え、新たな勉強も必要になっているが、老体ながら楽しんでやらせてもらっている。

5 審判活動

審判員活動は順大に赴任した20代から始まる。既に国際規定もあったが、国内規定との相違点はわずかな時代だった。しかし「効果」の導入や異見の表示など国内外の乖離がはじまると、大先生達は去って行った。おかげで若手が登用されて、首都圏在住というだけで声がかかり経験を積む機会も増えた。

審判員としてマニュアル的なものが必要だとの思いから、当時審判委員会委員長の竹内善徳先生に監修をお願いし『柔道のルールと審判法』を作った。しかし、審判法を著したからといって自分の審判が上手くなるわけでもなく、厳しい眼を覚悟しての活動が続いた。結局、オリンピック以外のほとんどの大会は経験した。また、後半は審判員を監査する Jury も務めたが、自分の修行にもなったし、別角度から柔道を広く眺めたことで自分の理解も深まったと感じている。

ルールは刻々と進化するもので競技内容を支配する。温故知新を考えると、日本の誰かがしっかりした記録を残しておくべきであると考えている。

終わりに

こうして振り返ってみると、いろいろな分野の仕事を与えられながら、結局、何も成し得なかったことが明白で忸怩たるものがあります。しかし、「人間の真価はその人が死んだとき、何をなしたかではなく、何を成そうとしたかできまる」ということばを支えに、残りの時間も柔道の修行に励もうとの思いを新たにしています。